

〈論文〉

「師道塾」における実践的指導力の基礎の錬磨 — 中学校社会科・高等学校地理歴史科の模擬授業を通して —

田中 洋平・土井 進

要 約

本論では、淑徳大学人文学部歴史学科に設置されている学生主体の研究会「淑徳大学教職サークル師道塾」における教育活動と、そこから浮上してくる教職課程の課題、及び今後の展望について論じた。同塾では、参加する学生が将来教職に就くこと、あるいは教育実習生として教壇に立つことを想定し、参加者を募っている。ここに参加する学生は、模擬授業の徹底的な反復によって、教授技術を中心とする授業力の向上を目指すとともに、高等学校までに修得しておくべき知識を再確認することで、大学での講義内容についても理解を深めているという、新たな学びの循環サイクルを構築している。併せて、日々の講義開始前の時間を利用した教員採用試験対策に関する取り組みについても、その一端を紹介した。

キーワード

教職研究会「師道塾」 実践的指導力 模擬授業 中学校社会科 高等学校地理歴史科

1. 「淑徳大学師道塾」開塾の前提

本学人文学部歴史学科では、教職課程を履修している学生を対象として、「淑徳大学師道塾」（以下「師道塾」と略す）という学びの場を設けている。この名称は、同学科において教職課程を担当している土井が命名した。同塾では、参加する学生が将来教職に就くこと、あるいは教育実習生として教壇に立つことを想定し、模擬授業をおこないながら、実践的な授業力の向上に努めている。本論では、その取り組みを以下に紹介するとともに、そこから浮上する従来型の教職課程、教員養成のあり方についての課題について論じていく¹。

筆者のひとりである田中は、本学に赴任する以前、非常勤講師・専任教諭として9年間高等学校の歴史教育の場に関わってきた。特に専任教諭となってからは、毎年卒業生や地元の国立大学から教育実習生を受け入れ、その指導にあたってきた。ここで痛感させられたのは、大学の教職課程において、実習生は理論的かつ抽象的な事柄についての知識は身に付けているものの、実際に授業を担当するにあたっての実践力が著しく欠けている点である。大学での学びの場において、これまでに1度も授業をしたこ

平成29年9月29日受付 平成29年12月12日受理
たなか ようへい：淑徳大学 人文学部 助教

どい すずむ：淑徳大学 人文学部 教授

とがない学生も存在し、そうした教育実習生にとっては、教育実習の場が教壇に立つ初めての経験となっていた。もちろん実習生のなかには、塾などでのアルバイトを経験することで、授業に対するある程度の「場慣れ」をしている学生も存在したが、いかにも我流であり、生徒を前にしてそのまま教壇に立たせることができた例は皆無であった。いずれの学生も勤勉で実直であり、教育実習に対する相当の熱意を持ち合わせてはいるものの、そうした気持ちの部分だけで授業を展開することは不可能である。高等学校の教育現場を預かる教員のひとりとして、大学における教職課程の課題を知ることとなった。

顧みて、筆者は学部学生時代、経済学部において中学校及び高等学校の教員免許を取得した。そこで設定される教職関連科目は、教育原理、教育史、教育法規、あるいは教育心理学といった分野が中心であり、学生が実際に人前に立ち、授業を行うような講義は半期1科目のみであった。筆者の事例が例外的なのではなく、教育学部系統以外で教職課程を履修し、教員免許を取得しようとする学生にとって、多くの場合、実際に授業をする機会をほぼもたないまま、教育実習に臨まなければならない。教壇に立つにあたっては、教科書の内容を生徒が理解しやすいかたちで整理・体系化することや、板書の仕方、あるいは生徒の様子を見ながら適宜発問を盛り込んでいくといった、最低限の教授技術が必要となる。教育実習生は、これらの点に関し、大学の教職課程で十分に修得することのないまま、実際の学校現場で授業することが求められるのである。こうした実態は、教職課程が一般の大学にも開放された戦後に限ってみても、常態化していると考えてよいのではないか²。換言すれば、教職課程を設置している多くの大学では、実践的な授業力の修得という面において、大きな課題を抱えている現状にある³。

授業者の知識や教授技術が如何に未熟なものであるとしても、その授業を受けなければならない生徒にとっては、1度きりの授業である。教育実習生であっても、初任教員であっても、10年を超えるキャリアを有する教員であっても、一定以上の水準で授業を展開しなければならないことは自明である。そうであるならば、大学で提供される教職課程の枠内、もしくは枠外において、たとえ模擬的な授業であるにせよ、自ら教壇に立ち、その実践力を徹底して学ぶことができる場が必要なのではないだろうか⁴。「教育実習は、大学の教職課程における理論と教育実践をつなぐ大切な教育活動である」⁵ことは確かである。加えて上記の点を踏まえるならば、教育実習という実践の場に出る前に、学校教育における理論的・体系的な教育学的知識の習得とともに、教育実践に耐えうる授業力を身につけることが必要とされている。筆者が学生とともに「師道塾」を運営する問題意識はここにある。

2. 「師道塾」における中学校社会科・高等学校地理歴史科の模擬授業の実践

「師道塾」は、本学に人文学部歴史学科が設置され、1期生が入学した2014年後学期に発足した。以降1年次前期は、大学生活に慣れることを優先したうえで、毎年後学期から入塾学生を募集し、15名から20名程度がこれに参加している。年次生ごとに教職課程履修者の人数にばらつきがあるが、そのなかでも6割から8割程度の学生が正規履修科目外で設定されている同塾で学んでいる計算になる。時間は、筆者の講義や会議日などとの兼ね合いから、毎週火曜日の4、5限に固定している。

ここに参加している学生は、必ずしも将来教職に就くことを目指しているわけではない⁶。現実的には、本学科で取得することができる資格のひとつとして、教職課程を履修している学生も少なくない⁷。この点において、教員養成を主とする教育学部系統とは実情を異にしているものと考えられる。しかしながら、最終的に教員採用試験を受験することなく卒業することを予定している学生であっても、学部4年次に設定されている教育実習への不安感は大きい。このことが「師道塾」への参加者を増やしている要因であると言えるだろう。同塾では、教職への就職希望者のみを選抜し、それらの学生を対象とする

のではなく、教職課程履修者であれば、本人の希望によって広く門戸を開いているのが特徴である。
次に「師道塾」を開塾するにあたって、筆者が配付した「開塾にあたって」のプリントを提示する。

淑徳大学の教職サークル「師道塾」の発足にあたって

淑徳大学人文学部歴史学科 田中 洋平

「将来は教員になりたい」という思いではなく、「自分がそれまで経験してきた学校教育とは何だったのか」ということを問い直すことをほとんど唯一の目的として、私は大学入学後、教職課程を履修することにした。当時の自分がもっていたこうした問題意識(?)は、今から振り返ってみると何とも生意気で、未熟であり、それでも大学生になった以上、学ぶことに対して、何らかの問題意識をもつ必要があるという「気負い」があったように思う。

1年次の「教育原理」の講義で、『教師修業10年』(明治図書)という本を読んで、課題レポートを提出することになった。著者は向山洋一。初等教育に携わる関係者の間では、非常に著名な教員であるそうだ。当時学生だった私は、もちろんそんなことを知らない。先入観のないまま、同著を読み進めた。

「教育において、その多くの部分は『技術である』」。同書の主張をあえて一言で表現するなら、こう言えるだろう。「教育」が「技術」……。気負った大学生であり、まだ1度も教壇に立ったことのない当時の私は、こうした発想に違和感をもった。教育は心の部分、つまり教員側の「熱意」であったり、豊かな「発想力」などではなく、「技術」が大切であるという。心の部分を伴わない教育が、教育たり得るのだろうか。そんな読後感をその後も引きずっていた。

紆余曲折を経て29歳になる年、はじめて高校の教壇に立つこととなった。当初は大学院生との二足の草鞋を履きながら、日本史を教えていた。ここで痛感する。「教育はその大半が技術である」。

授業で生徒の発言を引き出すのも、学園祭の企画を裏で支えるのも、生徒間のトラブルを解決するのも、単なる偶然や思いつき、あるいは未熟な経験で上手くいくものではない。これまで心ある教員によって積み重ねられてきた知識や技能を修得することができて、はじめて教育は成立する。黒板前での立ち位置、チョークの持ち方、発声、間の取り方、あるいは生徒の注意力が散漫なときは、注意して静かにさせるのではなく、教員が話すことを止めることによって、こちらに気を向かせる……。こうした知識・技能が教育を支え、そしてその修得には、「熱意」が必要である。

淑徳大学人文学部の教職サークル「師道塾」では、私がこれまで修得することのできた教員としての「技術」を「熱意」とともに伝えていきたい。

3

ここでも記したように、「師道塾」では、実際に教壇に立つうえでの技術的な指導を主眼にしていることを確認しておきたい。

この「師道塾」では、参加者が高等学校で使用されている『日本史B』の教科書を分担し、毎回2名から3名が30分から45分程度の模擬授業を展開している。ひとりの学生が、半期のなかで2～3回の

模擬授業を担当することになる。それぞれの授業後には、予め配付された「模擬授業評価シート」に、生徒役となった学生が当該授業について気が付いた点を記入していく。そののち授業担当者となった学生を含めて、全体で問題点や改善点に関する意見交換をし、それを共有するという形式を採用した。最後に、筆者が総括的なコメントを述べるようにしている。

ここで議論されるのは、主として以下のような内容である。次に学生間の議論のもととなる「模擬授業評価シート」の内容を提示する。

「模擬授業評価シート」

- ① 板書案を見ながら授業を展開するのではなく、その内容を予め頭に入れておくことで、板書をするのみに注力せず、生徒の様子を確認しながら授業を進めることができていたか
- ② 授業内容について、ストーリー性をもったわかりやすい説明となっていたか
- ③ 一般の歴史科目にみられがちな知識・用語の羅列的な伝達に終わらず、聞いている生徒にとって興味をもてるような内容が盛り込まれていたか
- ④ 発声方法に強弱をつけるなど、授業の内容以外でも生徒の注意力を散漫にさせないような技術的工夫がなされていたか
- ⑤ 積極的な発問によって、生徒に考えさせる時間を設けていたか

本章では、各項目について、より詳細に内容を確認していくこととしたい。

授業を担当することになった学生にまず求めているのは、①の項目である。それぞれの学生は、教職課程を履修する過程において、板書案や指導案の書き方についての指導を受けることになる。しかしながら、筆者がこれまでに実見してきた事例において、それらを書き終えることで授業準備の大半を終えてしまっている学生が大半である。板書案や指導案の作成は、当該授業を行うために最低限必要とされる出発点であり、板書案を見ながら授業を展開することは、生徒の様子を見ながら授業を進めるといった、ごく基本的な授業技術を疎かにする可能性を高めることになる。授業慣れしていない学生にとっては、そうした傾向がより顕著になると言えるだろう。「師道塾」では、こうした観点から、板書内容がある程度頭に入れたうえで模擬授業に臨むことを求めている。

②と③の項目は、相互に関連する内容である。ともすれば用語の暗記に終始しがちな歴史系科目において、これらの視点は欠かせない。特に②は、それぞれの用語を有機的に結びつけながら、ひとつの授業を体系化することが求められる。また、「師道塾」に参加している学生が歴史学科の学生であることから、教科書の内容を板書として綺麗に整理するだけではなく、歴史教育と歴史学を結節させるような深みのある内容を盛り込むことを求めている。

④については、実際に授業をおこなううえでの技術的な問題である。生徒の注意力を引きつけるためには、授業内容を充実させるとともに、話し方に関する技能を修得する必要があるだろう。例えば、生徒の注意力を授業に引きつけようと考え、授業中常に大きな声を発し続けたとしても、生徒はやがて疲れを感じてしまい、かえって授業への集中力を失ってしまう。これを防ぐためには、時にささやくような声で授業を進めることで、生徒の集中力を喚起するなど、発声のトーンに強弱をつけることが必要である。こうした技術的指導は、これまでの大学における教職課程教育において、十分に強調されてこな

かったのではないか。この点については、教科教育学における理論的な言説のみならず、実際の教育現場に立つ教員や塾・予備校講師の授業方法からも学ぶべきことは多い⁸。

最後の⑤の項目に関しては、授業者からの発問と生徒の応答によって成り立つ授業が究極的な理想型であることを指導している。1時間の授業すべてをつかって生徒が当該項目に関する調べ学習をし、考える時間を確保する授業方法も存在するが、そうした授業を展開する前段階として、通常展開される授業においても発問が必要かつ重要であることを説いている。

筆者が模擬授業後に講評する内容としては、上記5項目のうち④に該当する事柄が最も多い。板書としては過不足のない内容であったとしても、こうした技術が欠落しているために、単調で平板な授業になってしまい、授業を受けている学生を飽きさせる様子が目に付くのである。この点は、授業を進めることに目一杯となりがちな学生にとって、意外と高い関門であるように見受けられる。また、⑤の項目についても、生徒役となっている学生の知識の習得程度、あるいは発問それ自体が漠然としていることによって、先生役の学生が想定していた回答を引き出すことができない場面も少なくない。そうした場合、実際の教育現場に立つ教員の多くは、発問内容を変えることによって次の展開を図っている。こうした観点から、同塾に参加する学生に対しては、発問のバリエーションに関して、多くの引き出しをもつように指導している。

このように、模擬授業をする学生に求めていることは、決して突飛なものではなく、むしろ正攻法で授業を運営していく術を身に付けて欲しいと考えている。しかしながら、模擬授業の経験が少ない低年次生にとって、これらの課題を意識しながら授業を行うことは難しい。特に初回の授業では、同じ大学に通い、日常的に顔を合わせている学生が生徒役となっているにもかかわらず、極度の緊張から前を向くことができず、黒板に直面して授業をしている学生も少なくない。また、板書案をまとめるにあたっても、どのくらいの分量が適切であるか不明であり、かつその内容が有機的につながったものであるのか否かの判断は困難であろう。ゆえに、特に1年次生については、上級学年の学生とともに板書案を作成してもらいながら、模擬授業におけるつまづきを軽減させる方策を採っている。

ここで「師道塾」において3年次生の学生が実際に作成した授業プリントを提示し、同塾に参加している学生がどのような模擬授業を展開しているのか確認してみよう。なお、括弧中および下線部分の文章は、教師役の学生が授業中に板書した内容をそのまま記している。

「師道塾」では先述のとおり、原則として板書を中心とした授業展開を求めている。しかしながら、教育実習先の指導教諭によっては、プリントで授業を進めている場合もあり、この学生の授業では、上記の点を踏まえて自作プリントを用いた授業をすることとなった。

同学生の模擬授業はまず、「平氏政権」の基本的な事実確認を目的として、大きく4つに分類された項目のうち、2及び3の内容確認からはじまった。この部分はプリントの穴埋め形式となっているが、実際には板書を主体とした一般的な授業と考えてよい。そのうえで、1の分類に戻り、教科書中に登場する『平家物語』の史料を生徒役の学生に読んでもらい、そこからわかる内容をプリントの自由記述欄に記入させた。最後に分類項目4の「まとめ」欄をつかって、この授業でわかったことを確認し、それぞれに発表させて約40分の模擬授業を締めくくっている。

この学生の事例では、自作プリントを使用した際に生じる利点と欠点を十分に考慮しながら授業を展開しているのが特長であると言える。すなわち、プリント学習では、板書で授業を進める場合に比して、時間の短縮を図ることができる反面、授業を受ける生徒の学習活動に目を向けると、穴埋め部分を埋めることのみに注力し、その場で思考することを欠いた単調な授業になりがちである。その点この模擬授業では、プリントを使用することによって短縮することができた時間を有効に利用し、史料を丁寧に読

平氏政権 ―平家物語からみる―

1. 平氏の栄華

平治の乱後に、平清盛は後白河上皇を支援し、1167年に太政大臣となった。
史料1・2を読み、どれほどの栄華を誇ったか考察してみよう。

2. 平氏の経済基盤

- a) 全国の約半数の（ 知行国 ）
- b) 平氏は（ 宋 ）との貿易に力を入れた〈 日宋貿易 〉
- c) 平清盛は摂津の（ 大輪田泊 ）を修復した
→ これは西国を支配下に置き、瀬戸内海航路を確実なものにしたかったか
- d) 輸入品：（ 宋銭 ） 輸出品：（ 金 ・ 硫黄 ）

3. 外戚としての平氏

- a) 清盛は娘徳子を高倉天皇の中宮に入れ、その子安德天皇を即位させた
→ この結果（ 外戚 ）となった
- b) 平家は他氏を排斥し反発を買うことになった。
- c) 1177年、（ 鹿ヶ谷の陰謀 ）
 - ① 後白河法皇の近臣である、（ 藤原成親 ・ 俊寛 ）が計画
 - ② 結果として失敗に終わり、成親は鬼界ヶ島・俊寛は備前に流罪
 - ③ 1179年には（ 後白河法皇 ）を鳥羽殿に幽閉

4. まとめとして

平氏政権は武家政権か。それとも貴族政権か。思ったことを書いてください。

み込むことで、「平氏政権」に関する理解の深化を促し、一問一答的な授業展開に終始することを排している。歴史的事実の確認をしつつ、歴史に対する洞察力を深めることを企図したバランスのとれた授業であったと評価されるだろう。従来から歴史教育の実践研究において、いかに「歴史的思考力」を涵養するのか、という課題を問う声は大きい⁹。この点からも、当該学生の模擬授業は、大学での専門課程において、普段から史料を扱い、その内容を多面的に分析している歴史学科の学生ならではのものであったと精察される。

ここにとりあげた事例は、「師道塾」において展開される模擬授業の一例ではあるが、1年次生から3年次生へと学年を重ねるにつれて、試行錯誤を繰り返しながらも、先にあげた「模擬授業評価シート」の内容に基づいてその充実を図っている。

3. 「師道塾」での主体的で、対話的な、深い学びの広がり

教員になることを志した学生にとっても、人前で30分なり45分といった時間をつかって模擬授業をすることは、決して簡単なことではない。ましてや授業後には、自身の授業について、学生や筆者から辛辣な言葉を浴びせられる場面もある。あまりに準備が不足している学生には、授業を途中で中断させ、次週再度はじめてから授業をやり直させることもあった。「生徒の前に立つ」ということを簡単に考えて欲しくないという筆者の意向からである。学生にとっては、「授業がしたい」という気持ちとともに、「授業をするのが怖い」という感情が同時に横たわっているという声を聞く。

そうした学生の多くは、「師道塾」の前に、「模擬授業のための模擬授業」を行っている。自身の板書案が作成できた段階で、数人の友人学生の前で模擬授業をし、改善点を修正したうえで「師道塾」に臨んでいる。また、誰もいない空き教室で、1人授業をしている場面も散見される。加えて、先述したように、低年次生が模擬授業をおこなう場合には、上級生がその指導役となって板書案や授業展開についての助言をする方法を採用しているが、その授業後、上級生と下級生が2人でよりよい授業を展開するための「反省会」をし、再度授業案を練り上げている。「師道塾」は正規履修科目外で設定されている、言わば自主開講科目でありながらも、さらにそこから学びの輪が広がっていることは、何より学生自身にとって有益であろう。「教えることが最良の学び」という言葉を、師道塾に参加している学生はまさに体得している。授業前の準備から授業、そしてその後の検討、といった循環を学生自身が構築している点は、筆者が当初想定していた以上の学びを実現しているといえてよい。

また、当該回で授業をする側に回っていない学生については、その授業にコメントを付しながら、自身の授業に活かすということ以外にも、学びの場面がある。本学科は歴史学を主として学ぶことが想定されているため、当然歴史を学ぶことが好きな学生によって構成されている。しかしながら、高等学校で使用されている教科書の知識内容が完全に血肉化され、消化できているとは言い難い。この点は、依然として歴史知識の羅列とその暗記に終始しがちな高等学校での教育に起因するところが多いのではないだろうか。歴史に興味関心をもって入学した学生についても、知識の忘却は年次を追って大きくなる傾向にあると言えるだろう。生徒役となって模擬授業をうける学生にとっては、他の学生の模擬授業を受けることで、その長所と短所を確認し、自らの授業に活かすとともに、教科に対する自身の知識を再確認する場ともなっている。この効果は、次に述べるように決して小さくない。

4. 「師道塾」における「学びの循環」効果

2014年に新設された本学科は、2017年度に初めての教育実習生16名を送り出した。筆者はこの実習期間、実習校に赴き数人の授業を参観し、指導担当教諭と意見交換をする機会を得たが、いずれの学生も高い評価を得ており、自信をもって授業を展開していた。大学での学びのなかで、通常展開される受け身の講義ではなく、自らの意志で「師道塾」に参加し、実践的な授業力の下地をつくる営みを積み重ねてきたことの意味は大きい。教育環境の変化によって、実習校によっては、電子黒板やiPadでの授業を導入しているところもあったが、板書を中心とする基本的な授業形式に慣れておくことで、そうした新しい授業ツールを効果的に活用することができていた。

加えて「師道塾」に参加している学生は、高等学校までに修得しておくべき知識を再確認していることで、大学での講義内容についても理解を深めることができていた。模擬授業で自らが担当した範囲を卒業論文の題材に選ぶ学生も登場した。高等学校までに学んだ事柄が、より専門的な研究を進める大学の場において無駄ではないことを身をもって実感することができているのではないだろうか。

一方で、模擬授業の反復によって授業力の向上を目指す「師道塾」において、今後の課題となってくるのが、外池智が主唱する「臨場的授業」の経験であろう¹⁰。「臨場的授業」では、身近にある歴史的、地理的事象に関する史跡や景観の見学によって社会科や地理歴史科、公民科の理解を深めることを企図している。外池が指摘するように、小学校教育から高等学校教育にかけて漸次通減化していく学びの方法を「師道塾」でも追究する必要がある。本学歴史学科では、フィールドワークを主体とした講義・演習が盛んに展開されており¹¹、ここで学んだ内容は、模擬授業や中等教育の現場にフィードバックすることも可能であろう。

また、2012年8月に中央教育審議会がとりまとめた答申¹²のなかに盛り込まれたように、現在大学の教職課程では、『教科に関する科目』担当教員と『教職に関する科目』担当教員とが共同で授業を行うなど、教科と教職の架橋を推進することが求められている。本学科におけるフィールドワークは、歴史学を学ぶ学生のみならず、そこで講義を担当する教員にとっても「臨場的授業」そのものである。この点においても、今後の課題として浮上する上記の取り組みは、教職課程における枠組みの内外において議論すべき試みであると考えられる。

本論では、「師道塾」での学びを積み重ねた学生が、より多く中等教育の現場に立ち、自ら経験し、考えてきた「学ぶことの意義」を、次代を担う中学生や高校生たちに伝達していく、という「学びの循環」の起点として、同塾の存在が位置づけられることを確認しておきたい。

5. 「師道塾」における学生の学び

8

淑徳大学人文学部歴史学科では、開設当初から4年間にわたって「師道塾」を運営し、継続的な学びの場を提供してきた。ここでは1年から4年までの教職に志のある学生が集って切磋琢磨している。次に歴史学科1期生が2年次終了にあたって記した学びの一端を原文のまま紹介する。

○2年目の実感

私はこの師道塾が始まり、最初に模擬授業を行いました。その時の授業はひどいもので、今では「戒め」のようなものとなっています。そして、その「戒め」は、今でも私の糧となっています。2回、3回と模擬授業を行ううちに、その「戒め」を思い出すと成長しているという実感と共に、やる気が出てきます。そしてその「戒め」が、より私の教職への思いを強くしてくれます。私は師道塾の先生方と仲

間たちに、感謝の念を隠せません。

○知識の修得と人前に慣れる

「師道塾」を受講し続けて早くも1年が経とうとしています。この1年間で向上した所は2つあります。1つ目は知識の修得です。未熟ですがこれからも知識の修得に励みたいと思います。2つ目は人前に慣れたことです。「師道塾」では主に模擬授業をおこなっていて、一人で授業するといった形をとっています。教卓にいるのは私一人で、いつまでも恥ずかしがってはられません。私は殻を破り、教員採用試験で他の人たちを喰う思いで日々精進したいと思います。

○進歩した一年

今年の師道塾は、主に板書案の作成と模擬授業体験を田中先生に指導していただきました。一つの授業をするのにも様々な工夫をこらさなくてはならないこと、授業を作るために知識を確立すること、ペース配分を考えること、緩急をつけて重要語句を強調することなど具体的なテクニックをわかりやすく解説していただきました。この一年の学習で去年の自分には全くわからなかった具体的な授業のやり方が見えるようになり、進歩が実感できた一年になりました。(田中)

6. 早朝の「師道塾」における教員採用試験過去問の反復練習

教職志望の学生有志4名が毎週火曜日と木曜日の始業前、8:00～8:50に筆者の研究室に集って教職教養問題の東京都と千葉県の過去問を3回繰り返した。この取り組みによって1年次には100点満点で10点、2年次には25点、3年次には40点、4年次には60点まで学力が伸びてきた。しかし、目標の80点以上には残念ながら到達することができなかった。早朝の「師道塾」での合言葉は、「反復練習が不可能を可能にする」Practice makes perfect!であった。また、「淑徳誓願 草莽崛起」を墨書して研究室に掲げた。

学生たちは早朝から4年間にわたって精進したが、中学校社会科や高等学校地理歴史科の採用試験に合格できる資質能力を開発するには、まだまだであることを身に染みて痛感せざるを得なかった。教員採用試験に一度で合格できることはめでたいことであるに違いない。しかし、何度も何度も躓きながらも、目標を見失わず臥薪嘗胆するなかで総合的な人間力を磨き、資質能力の開発に努めることは、高度専門職に欠かせない試練であろうと考える。本学人文学部に教職課程を設置していただいていることの深い意義をかみしめ、さらに一層の努力を誓うものである。(土井)

【注】

- 1 なお、本論は第1章から第5章までを田中洋平、第6章を土井進が分担している。
- 2 必ずしも本論と趣旨が一致するわけではないが、戦前の閉鎖的教員養成のあり方に対する反省に立ち、戦後施行された開放制教員養成のあり方についても、一定の批判がある。ここではその一例として、小池俊夫「開放制教員養成の哲学と現実」(昭和女子大学総合教育研究センター編『学苑』No.835所収 2010年)をあげておく。
- 3 現在、各自治体において開講されている教員養成塾は、将来教職を目指す学生を対象とし、授業力の向上を含む学校現場での課題に対処できる能力を習得する目的をもって設置されている。こうした試みは、大学での教職課程履修を前提としつつも、その枠外でおこなわれている点を再度認識する必要があるものと考ええる。

- 4 こうした試みは、すでに各大学にて行われており、その実践的報告も多数存在する。ここでは近年の報告として、山中護「教員養成大学における模擬授業の系統的指導のあり方ー算数科及び社会科の実践をもとにー」(千葉敬愛短期大学編『千葉敬愛短期大学紀要』第39号所収 2017年)を例示しておく。
- 5 白山雅彦「教育実習に向けた教職課程における指導のあり方に関する考察ー今年度の教育実習の成果と課題をもとにー」(秋田県立大学総合科学教育センター編『秋田県立大学総合科学研究彙報』第18号所収 2017年)
- 6 例えば本学科が初めて卒業生を送り出す1期生のうち、教職課程履修者は16名であり、最終的に教員採用試験を受験した学生は5名である。
- 7 本学科においては、高等学校地理歴史、及び中学校社会の教職課程以外に学芸員課程を設置している。そのいずれか、あるいは両方を履修する学生が大半であり、資格の取得を希望しない学生は少数派である。
- 8 筆者はこうした観点の指導にあたって、専門的な実践報告ではなく、一般書・啓蒙書側面の大きい著作ではあるが、長年大学受験予備校において英語教育に携わってきた安河内哲也『できる人の教え方』(中経出版 2007年)を参考にしている。
- 9 渡邊明彦「高校日本史における『歴史的思考力』育成の課題ー静岡県東部の『授業時間数』を事例にー」(愛知教育大学編『教科開発学論集』第5号所収 2017年)
- 10 外池智「社会科教員養成における地域の教育資源を活用した授業構成演習ー秋田大学教育文化学部社会科教育研究室の取り組みを事例としてー」(日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第110号所収 2010年)
- 11 森田喜久男・三宅俊彦・遠藤ゆり子・田中洋平「歴史学科のフィールドワークについてー2015年度歴史調査実習を中心にー」(淑徳大学高等教育開発センター編『淑徳大学高等教育開発センター年報』第3号所収 2017年)
- 12 中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(2012年8月28日)